

C. ライト・ミルズの政治的公衆論再考

——社会学的想像力と歴史的特殊性を中心として——

伊 奈 正 人

1. はじめに

マイケル・ブラウオイ (Michael Burawoy) の米国社会学会講演 (2004) をきっかけにして、いわゆる公共社会学論争が起こった¹。C. ライト・ミルズ (C. Wright Mills) が再注目され、「社会学者が人々に届くことばで社会学を語ること」が議論された。社会学の存在理由を、学会として、再点検する意味はあったかもしれない。しかし、ミルズが遺した公共社会学の実質は、これにより、かえって見えにくくなったようにも思われる。

他方、この間も、政治史、政治思想史他の分野で史料研究がすすみ、冷戦下のイデオロギー対立のなかで固定されたミルズ像が修正されてきた。2021年には、「ミルズ・スタディーズ」を標榜する著作が出された²。そのなかで本稿が注目するのは、ジョン・ブルーワー (John Brewer) の論考である。ブルーワーは、英国社会学会の会長も務めたアイルランド、ベルファストの社会学者である。同書には、平和過程 (peace process) をキー概念とした公共論を書いている。社会学的想像力の観点から、南アフリカ、アイルランドをはじめとする和平の構築過程を考察した論考を踏まえたものである³。

¹ Michael Burawoy, "For Public Sociology" *American Sociological Review*, 70, 2005. また、拙稿「公共社会学の現代的条件：プラグマティズムと「公衆との対話」『成城大学社会イノベーション研究』(矢澤修次郎教授退任記念号), 10(1), 2015を参照。

² John Frauley, ed., *The Routledge International Handbook of C. Wright Mills Studies*, Routledge International Handbooks (English Edition), Routledge, 2021.

³ John Brewer. *C. Wright Mills and the Ending of Violence*, Palgrave Macmillan, 2003. Id. *Peace Processes: A Sociological Approach*, Polity Press, 2010.

そこで、ブルーワーは、本稿でとりあげる歴史的特殊性 (historical specificity) 論を検討している。

ミルズ公共社会学の核となるのは、政治的公衆 (political public) 論であると筆者は考えている。ところがミルズは、1940年代後半ころから政治的公衆論からは離れた、とされてきた⁴。たしかにテキストに文言は見当たらなくなった。しかし、ブルーワーの議論を参考にすることで、冷戦期、イデオロギー的に固定された評価を質し、公衆の政治／政治的公衆の考え方を再構成することができるのではないか、と思われる。

では、なぜ歴史的特殊性に注目するのか。第一に、この概念が、政治的公衆を再評価するために必要な社会科学史の 이슈を開示するからである。第二に、この概念は、社会学的想像力の諸契機を媒介し、一貫する視点としての政治的公衆の再構成に道を拓くからである。

以下では、ミルズの歴史的特殊性の概念規定を検討 (2, 3) する。そして、社会科学史のコンテクストを整理し (3の一部と4)、最後に、社会学的想像力の定義を再検討して、核となる政治的公衆のイメージについて論じる (5)。

2. 歴史的特殊性の概念 1——『社会学的想像力』における定義

2.1. 社会構造の比較と歴史の利用

まず、『社会学的想像力』第8章「歴史の利用 (Uses of History)」における歴史的特殊性論をみる⁵。それは、マルクス (Karl Marx) の考え方として

⁴ 政治的公衆の再構成という知見は、中村好孝 (「公衆のための社会学」一橋大学修士論文、1999) および後述の高橋肇の諸論考から学んだ。中村の議論は、エルドリッジの知見によっている (John Erdridge, *C. Wright Mills*, Routledge, 1983, p.44)。中村は、公衆の社会学の考察に歴史的特殊性概念を用いている。この点は伊奈正人・中村好孝、『社会学的想像力のために——歴史的特殊性の観点から』(世界思想社、2007)の10章を参照。エルドリッジや中村は、ミルズの語彙や文体の変化を考察している。本稿はこれに対して、一貫したミルズ像を再構成しようとしている。

⁵ C. Wright Mills, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press, 1959, (伊奈正人・中村好孝訳『社会学的想像力』ちくま学芸文庫、2017)。

論じられている。ミルズは、歴史を利用することで、学問的探求の成果（分析や方法）を、超歴史的に一般化することを回避できる、と言う。すなわち、探究の妥当性を特定（specify）し、事態が他でもあり得た可能性を比較することができる。「歴史の利用」とは、多様性を根拠に考えること、とされている。

「なにか説明されるべきか述べるときでさえ、それに必要となる射程を提示しうるのは、人間社会の歴史的多様性についての知識だけである。時代と社会が異なれば、ある特定の問い…（中略）…の答えも異なる。それは、問いそのものがしばしば定式化され直されなければならないという意味である。私たちは、社会学的な問題を適切に問いかけるだけでも、歴史によって提供される多様性を必要とするのであり、いわんやそれに答えるためにはなおさらである。私たちが提出する答えや説明は、いつもというわけではないが、しばしば比較の観点をとる。」⁶

超歴史的な一般化、普遍化とは、危機（ファシズムや大衆化）の解決を、単一の決着、たとえば工学的な知の改造——「バージョンアップされた政治と公衆」の論定——に委ねることである。こうした「解決」は、危機をヨーロッパに限定し、米国の兆候に目を向けない、とミルズは批判した、そして、歴史的多様性をベースに、比較の方法を用いて歴史を往還し、社会事象をスペシフィックに捉えることが重要である、と「歴史の利用」を主張する。

「たった一つの社会を静的なものとして理解することさえ、歴史的素材を利用しなければ望めない。社会のイメージは、歴史特殊的なイメージである。マルクスの言う「歴史的特殊性の原理」は、第一に、いかなる特定の社

⁶ Ibid. p. 147.

会でも、それが存在する固有の時代の観点で理解すべきだという指針である。「時代」がどのように定義されるのであれ、ある特定の時代に一般的である制度、イデオロギー、男女の諸類型は、一つの独特なパターンのようなものを構成する。これは、そうした歴史的類型は他の類型と比較できないという意味ではないし、そのパターンは直感的にしか把握できないという意味でもない。その意味は、この歴史的類型のなかで、変動の多様なメカニズムがある独特な種類の交差をするようになるということであり、これが歴史的特殊性の原理の第二の内容である。このメカニズムのことを、カール・マンハイムは——ジョン・スチュアート・ミルにならって——「媒介原理」(principia media)と呼んだが、それこそが、社会構造に関心をもつ社会学者が把握しようとしているメカニズムなのである⁷。

ミルズの著作にはしばしば見られることだが、「媒介原理」に注は付されていない。内容的には、ハンス・ガース (Hans Heinrich Gerth) との共著『性格と社会構造』⁸ におけるヴェーバー的な類型論とほぼ同一のものである。近代初頭の自由放任的な秩序から、ファシズム的な秩序、社会主義的な組織化、システム制御な秩序構成までが類型化されている。これを用いて、ミル

⁷ Mills 1959, op.cit. p. 149.

⁸ Hans H. Gerth & C. Wright Mills., *Character and Social Structure: The Psychology of Social Institutions*, Harcourt: Brace & World Inc., 1953, (古城利明・杉森創吉訳, 『性格と社会構造—社会制度の心理学』青木書店、1970)。『性格と社会構造』は、ガースの講義ノートをベースに、プラグマティズムの社会理論を補充しながら執筆されている。プラグマティズムの知識社会学理論、動機づけの社会学をはじめとする議論は、ガースと出会う前のテキサス時代に、書かれた学会誌投稿論文がもととなっている。C. Wright Mills, "Language Logic and Culture" Horowitz, I. L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, [1939] 1963, (佐野勝隆訳「言語、論理、文化」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、1971) 他。ガースの貢献については、ガース門下のオークス、ヴィディックの著作 Guy Oake & Arthur J. Vidich, *Collaboration, Reputation and Ethics in American Academic Life: Hans H. Gerth and C. Wright Mills*, University of Illinois Press. 1999 の他、Daniel Geary, *Radical Ambition: C. Wright Mills, the Left, and American Social Thought*, University of California Press, 2009 など主要な伝記研究を参照。

ズは米国の社会科学が提供した処方箋を、類型の1つとして相対化した。

2.2. 変動の解釈と歴史的特殊性——歴史性への自己反省

社会構造だけではなく社会変動についても同様の類型論、媒介原理論は応用されている。変動法則を定立しようとする議論についても、近代社会との対峙という論点と関連付けられ、妥当性が限定されている。

「初期の社会理論家たちは、社会の不変の法則——自然科学の抽象化された手続きが、「自然」の質的な多様性の下で共通している法則を導いたのとまったく同じように、すべての社会に当てはまる法則——を定式化しようとした。私の考えるところ、いかなる社会学者によっても、ある時代に特有の構造に関係しているものと理解してはならない超歴史的「法則」が明言されたことはない。他の「法則」は結局のところ、空虚な抽象であるか、あるいはまったく混乱したトートロジーになる。「社会の法則」やさらには「社会の規則性」の唯一の意味は、ある歴史特殊な時代のなかの社会構造について発見——そう言ってよければ構築——するような、「媒介原理」である。私たちは、歴史変動の普遍原理を知らない。私たちが実際に知っている変動のメカニズムは、研究している社会構造によって変化する。なぜならば、歴史変動とは、社会構造の変化、つまりその構成要素間の関係の変化であるからである。社会構造が多様であるのと同じように、歴史変動の原理も多様なのである。」⁹

さらに、「歴史的の利用」それ自体についても、歴史的特殊性の原理が適用・省察される。すなわち、時代や社会によっては、「歴史的要因」を参照する必要がない場合もある。

⁹ Mills 1959, op.cit. p. 150.

「簡単に言うと、歴史の重要性それ自体が、歴史的特殊性の原理の影響を受けるのである。確かに、「すべてが過去からやって来た」と言われるのが常かもしれないが、しかしその「過去からやって来る」というフレーズの意味が問題なのである。世界には、まったく新しいことが存在することもある。つまり、「歴史は繰り返す」し「歴史は繰り返さない」。それは社会構造と時代によるのであって、その歴史に私たちは関心をもつのである。」¹⁰

ミルズは、歴史的特殊性の原理は、心理学の対象としての個人史、“biography”にも適用される、と言っている¹¹。制御する科学の確立によって知の改造が可能であるという知見に対して、歴史的な社会構造と人間の深層心理の問題が対置され、問題化が行われている。

3. 歴史的特殊性の概念 2——『マルクス主義者たち』における定義

3.1. 『マルクス主義者たち』と歴史的特殊性

ミルズは晩年、「新しい左翼への手紙」を書き、ヨーロッパやラテン・アメリカ、アジアにおける政治の胎動に注目した。遺作となった『マルクス主義者たち』では、「率直なマルクス主義」(plain Marxist)を標榜し、これが「マルクス主義への接近」という通説の根拠となった¹²。本書でも、歴史的特殊性の原理について論じられている¹³。

歴史的特殊性の原理とは、第一に社会についての探求のルールであり、第二に他の理論や概念を批判的に論じる方法であり、第三に社会生活と歴史の性質についての理論である。すなわち、過度の一般化を避けて、時代の制約

¹⁰ Mills 1959, op.cit. p. 156.

¹¹ Mills 1959, op.cit. p. 163.

¹² C. Wright Mills *The Marxists*, 1962 Dell Pub. Co. (=1971, 陸井三郎訳『マルクス主義者たち』青木書店)。こうした評価の多くは、アプセーカーの評価を引きずっている。Herbert Aptheker, 1960, *World of C. Wright Mills*, Marzani and Munsell, 1960 (陸井三郎訳、『ライト・ミルズの世界』青木書店、1962)。

¹³ Mills 1962 op.cit. p. 143 (同訳、1964: 上 p.p. 40-41)。この部分については、伊奈・中村前掲書 2007 で論じている。

を吟味し、比較の方法で考察を行うこと。そこで、「法則」や趨勢が歴史の制約を受けていることを強調する。

本書ではレファランズが示されているが、カール・マルクスの著作ではなく、カール・コルシュ（Karl Korsch）の『カール・マルクス』である¹⁴。コルシュからの引用はこのうち第一の点についてである。

「(歴史的特殊性の原理は：筆者補足) われわれに対して、特殊な時代の枠のなかで発見した法則性や傾向を定式化することを指示するとともに、この時代の限界をこえてそれを普遍化しないように注意をうながす。われわれは「あらゆる社会生活の普遍的条件」を研究するのではない。われわれが研究するのは「今日のブルジョワ社会においてそれらがとどるところの特殊歴史的な形態」である¹⁵。

3.2. 「率直なマルクス主義者」と自省的な視点

コルシュは、ジョルジュ・ルカーチ（Lukács György）とともに、史的唯物論の再検討を行った人として知られる。ソヴィエト・マルクス主義とは一線を画し、新しい主体・組織化を探求する議論として評価／批判された。大衆社会の問題、巨大な政治経済機構の制御の問題、消費社会の問題などと対峙し、それを問題化する主体や組織はどのように可能かを探求することに「利用」された。実際ミルズも晩年、公民権運動の萌芽に着目し、様々なポテンシャルのあるものに注目していたとされ、晩年における「思想変化」の根拠になっている。

¹⁴ Karl Korsch, *Karl Marx*, John Wiley and Sons, 1938, (野村修訳『マルクス その思想の歴史的・批判的再構成』未来社、1967)。訳者の野村によれば、本書のテキストは3種類あるという。1936年の自筆ドイツ語版原稿、1938年公刊のコルシュによる英語訳原稿、1947年から改訂がなされて、1950年に確定されたドイツ語原稿である。野村訳はこのうち第三のものを訳したものである。引用ページからして、1938年の英訳をミルズは用いている。

¹⁵ Mills 1962 op.cit. p. 143, (同訳、1964: 上 p.p. 40-41)。

特殊性は、こうした文脈で、弁証法的論理学の用語であり、ヘーゲルやマルクス、ルカーチやコルシュの重要概念である。変革主体や組織化のポテンシャルを考えるときに、反省（Reflexion）や根拠（Grund）のカテゴリーがポイントとなる。ミルズも、歴史的な省察、反省によって、その時代の社会問題解決の根拠となるものを考えている¹⁶。しかし、ミルズの議論は、『社会学的想像力』のそれと同様に、類型論である。つまり、過度に普遍化されがちなものを歴史的多様性のなかでの類型として捉えるということである。法則的な歴史認識も、ミルズが批判した社会制御の科学（システム論や調査法）と同様、知の1類型とされる。

4. パワー・エリート論と社会学的想像力——スペシフィックな実践

4.1. 公共社会学と権力論争——スペシフィックなターミノロジー

マルクス主義と社会学の問題を考えるとき、ミルズ社会学は重要な手がかりとなってきた。マルクスの経済学批判との類比において社会学批判を考えることもできるし、世界戦争や帝国主義に対する洞察も示唆に富んでいる。それ故、マルクス主義への接近という議論が説得力を持った。ただ、議論がマルクス主義の用語系に回収され、政治的公衆論の重要な論点であるターミノロジーの問題が、見失われてしまうのは問題である。

ミルズは、術学的なことばを韆晦的に使うこともあったが、ハイブラウなスタイル——カテゴリーや概念の「使用」——とは距離をとっていた。ミルズは、一方で、学術用語や論壇用語——たとえば“issue”（動詞形にも注意）——を用いつつ、他方で生活圏のことば——たとえば“trouble”——を交差させ、社会学的想像力のターミノロジーを工夫している。ミルズは、批評・学術のことばと、生活圏のことばを織り交ぜ、米国の公衆に語りかけた。これを理解することで、ミルズの歴史的特殊性論＝公衆による歴史の「利用」

¹⁶ ヘーゲル論理学の本質論の議論。これについては、伊奈正人『ミルズ大衆論の方法とスタイル』（勁草書房、1991）の序章で論じた。マルクス主義における主体論をめぐるイデオロギー対立とも関わる。

の意味ははじめて明らかになる。社会学的想像力の応用編とも言える『パワー・エリート』を用いて検討を行おう¹⁷。

『パワー・エリート』をめぐる論争は、自由主義的な民主主義のゆくえ、大衆化に対する評価と処方と関わっている。非合理的な扇動も辞さない秩序が政治的選択肢の1つとしてクローズアップされ、ファシズムが顕在化した。そして、社会主義の計画思想という選択肢、ケインジアン的な政治経済モデルという選択肢、自由主義の保守する選択肢が比較された。

ミルズの伝記研究の多くは、時代の変動を目の当たりにしてミルズが成長したことを描いている¹⁸。ミルズは、地域コミュニティの変貌のなかで成長した。ガンファイトに倒れた祖父とホワイトカラーの父、カウボーイのテキサスと産業主義のテキサス、小さな田舎町と巨大化する産業都市を照らしあわせた。ミルズは前者に愛着を持ち、後者に反抗的な態度をとったという。それらに、ヨーロッパのファシズムがコミュニティの核となる中間集団を破壊したこと（Gleichschaltung＝平らにならず強制的な均質化）を重ねたのが、『パワー・エリート』である。『パワー・エリート』は、家族、学校、教会を核とした米国のコミュニティの変貌について論じることからはじまっている。こうした変化は、米国のごくふつうのまちのごくふつうの公衆ならば、感じてきたことでは必ずである。ここに訴えかけるのが——政治的公衆の条件を問う——ミルズ社会学の戦略であった¹⁹。

他方で、ミルズの問題提起は、社会科学の古典的な問題を再検討するものであり、民主主義、産業主義への省察をうながしているものである。それ

¹⁷ C. Wright Mills, *The Power Elite*, Oxford University Press, 1956, (鶴飼信成・綿貫讓治訳『パワー・エリート』ちくま学芸文庫、2020)。Mills 1959所収の、「知的職人論」は、ミルズの方法論の実践について解説したものであるが、そこで、『パワー・エリート』の執筆過程を例にして、議論が展開されている。

¹⁸ 伝記研究の動向は伊奈前掲 1991、伊奈 2013、伊奈「文庫版解説」C. ライト・ミルズ『パワー・エリート』ちくま学芸文庫、2020などを参照。本節の記述は、文庫版の解説に加筆したものである。

¹⁹ そのこともあってか、ミルズは保守主義者からも評価を得ている。例えば、Robert Nisbet, *Sociology as an Art Form*, Oxford University Press, 1976, (青木康容訳、『想像力の復権』ミネルヴァ書房、1980)。

は、米国の社会科学の自負、そして社会主義的な社会科学の自負に、真っ向から挑戦するものであった。ミルズが問題化した無軌道な政治経済社会のアンダー・コントロールは、こんにちに至るまで論じ続けられている。

20世紀中葉の米国社会科学は、確固とした自負を持っていた。すなわち、ヨーロッパの社会科学は、近代産業主義の発展に見合った社会の改造案を提示できないまま、ファシズムや社会主義と向かいあっている。これに対して、米国の社会科学は知の改造によって、多元的な民主主義に基づいた新しい産業国家を建設しうる、と。米国の秩序と繁栄は、それ以前からも、ヨーロッパの社会学者から注目されていた。M・ウェーバーをはじめヨーロッパの社会学者が米国を訪れ、宗教を核にした堅固なコミュニティのうえに、産業化が進んでいることに注目した²⁰。

米国の社会学者のなかには、ミルズがつぶさに眺めたコミュニティの変貌を直視していた者たちがいる。たとえば、リンド夫妻は「ミドルタウン（中西部のごくふつうのまち）」での参与観察に基づき、変貌するコミュニティを描き出した。T・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen）は、産業の自律性が、欲望の暴走、消費の暴走によって制御不能になっていることを批判し、恐慌や世界戦争を予言した。ミルズは、こうした議論を、テキサス大学で経済学者エアーズ（Clarence E. Ayres）に学び、ガースの前では、ヴェブレンの洞察を、好んでウェーバーの社会学的分析に重ねたという²¹。

ウェーバーは、ヨーロッパの大衆社会化を予感し、徹底した合理化＝権力統制で暴走に対処しようとする一方、米国の秩序はヨーロッパと異なるものとして評価したとされてきた。こうした議論は、ヴェーバーの配偶者（Marianne Weber）の評伝に詳しい。はたして、ガースとミルズの翻訳・解説も、

²⁰ ヨーロッパと米国の社会科学の対比の詳細については、伊奈正人「ミルズ」『社会学史入門』（ミネルヴァ書房、2020）、徳永恂『現代思想の断層―「神なき時代」の模索』（岩波新書、2004）を参照。

²¹ 雑誌 *The New Republic* にも関わったエアーズから、ミルズは、プラグマティズムやヴェブレンの社会理論だけでなく、ヴェーバーやマンハイムの学説を最初に学んだことは、テキサス大学で執筆した論文（注8）からもわかる。

この評伝に依拠して書かれている²²。

米国経済の無軌道を批判したヴェブレンも米国社会の大衆化までは論じていない。社会制御、テクノクラシーの可能性を、「技術者のソヴィエト」と評価している。ミルズとガースが、ジェームズ・バーナム (James Burnham) を批判していることにも注意したい²³。労働組合について考察したバーナムは、ヴェブレンにも影響を受けつつ、経営者革命論を展開したことで知られる。社会制御、マネジメントといった工学的発想は、社会システム、社会調査などの発想と同様、相対化される必要があるというのが、ミルズの考え方である。

ウェーバーもヴェブレンも、そして「冷戦期東西」の社会科学も、とらえることができないうまく新しい冷厳な権力機構の危うさをとらえるため、パワー・エリート概念が導入されることになった。米国社会を、ファシズム体制と比較し、権力集中、大衆社会というモデルでとらえようとする『パワー・エリート』は、大論争を巻き起こした。

以上、拙稿(文庫版「解説」)に加筆しながら論を展開してきた。権力論争のまとめの部分を用意しておこう²⁴。

『『パワー・エリート』を批判した社会科学は。通常四つに整理される。

第一は、リベラルな社会科学である。ヨーロッパの古典を踏まえ、社会設計、社会計測のツールを生み出した。工学的な発想に立って、大きな政府・消費経済という需要サイドの経済思想を補填することで、権力集中、欲望の暴走を制御し、コミュニティを核とした多元的民主主義を改造し、制御する

²² Hans H. Gerth & C. Wright Mills eds. *From Max Weber: Essays in Sociology*, Routledge, 1948. ガースとミルズは師弟関係にはない。

²³ Hans H. Gerth & C. Wright Mills "A Marx for the Managers" *Ethics* Vol. 52, No. 2 (Jan., 1942), 同論文は、ガース論集に所収 (Joseph Bensman, Arthur Vidich, and Nobuko Gerth, eds. *Politics, Character, and Culture: Perspectives from Hans Gerth*, Greenwood, 1982)。ガース執筆の物象化論の論文なども目につく。

²⁴ 引用部分は、次の書物の論争整理に基づいている。G. William Domhoff and Hoyt B. Ballard eds., *C. Wright Mills and The Power Elite*, Beacon Press, 1968.

ことが可能であると判断した。

第二は、ラディカルな社会科学である。マルクス主義の考え方に立ち、政治、経済、軍事の支配階級が一元化し、独占状態にあることを批判する。社会主義に向かう運動をラディカルに組織化することで、制御された計画社会を実現できると判断していた。

第三の批判は、保守的な社会科学である。それは、リベラルなものにせよ、ラディカルなものにせよ、人為的に制御をめざす社会科学、そのイデオロギーに疑義を提出する。そして、時代をくぐり抜けてきたコミュニティの伝統、道徳の原理的保守だけが、社会秩序の根拠たり得ると判断した。

第四はハイブラウな社会科学で、人々の実感に訴えるミルズのスタイルの対極にあり、洗練されたことばの精神性が新しい秩序規範の根拠たり得ると判断した。

四つはそれぞれのやり方で、権力、欲望、軍事の暴走を制御する根拠を示している。しかし、こうした「よりどころ」を提示し、アンダー・コントロールを宣言することよりも、暴走のリスクとメカニズムを考察することが大事なのではないか。ミルズは、近代民主主義が切り捨ててきたもの、ふたをしてきたものを、注意深く見つめた。少数者の支配もその一つである。迷うことなくエリート概念が採用され、集中する権力の制御不能が描き出される。パワー・エリートは旧来の人格的な存在ではなく、それを呑み込むクールで放縦な巨大機構の機能的部分である。」²⁵

4.2. エリート概念をめぐる——スペシフィックなことばをめぐる

では、なぜエリート「概念」を用いるのか²⁶。このことばの採用には、古典

²⁵ ミルズ前掲訳書、2020。p.p. 715-716。

²⁶ 伊奈正人「エリート論／エリート支配」日本社会学会理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』丸善 2017。伊奈正人・中村好孝「エリートと支配」井上俊・伊藤公雄編『政治・権力・公共性（社会学ベーシックス；第9巻）』世界思想社、2011。本節の記述は、前者をもとに、紙数の関係で省略したことを加筆した。

的社会科学に対するミルズの洞察と、公衆に語りかけるミルズの戦略との双方が見てとれる。

『パワー・エリート』では、概念の典拠として、モスカ (Gaetano Mosca)、ミヘルス (Robert Michels)、パレート (Vilfredo Pareto)、シュンペーター (Joseph A. Schumpeter) らの名前が注記されている。ここでも、レファランスはない。しかし、労働運動他の運動論の立場をとるにしても、社会計画論他の統治論、ピースミールな改良論の立場をとるにしても、「少数者の政治」という問題に逢着することを、ミルズは若い頃から学んでいた。19世紀中葉以降、増大する中間階級、不安定な群衆が問題化される。この問題を解決する多数者の民主主義はどのようにしたら可能かを問いかけ、民主主義の再編成が模索する必要を、ミルズは感じていた。『パワー・エリート』に先行する労働組合エリート論も、ホワイトカラー論も、——中間階級の組織化をめぐるマルクス主義内部の論争も視野に入れ——この点を論じ、政治的公衆組織化の条件を問うものであった²⁷。

すでに述べたようにミルズは、亡命知識人ガースから、ヨーロッパの集合行動 (ファシズムや社会主義) と直接対峙した社会科学の知見を学んだ。すなわち、保守と革新、社会主義と自由主義、革命と改良、放任と計画などの議論の狭間で、多数者の民主主義に介在する選良的な少数者、合理的な再組織化に介在する扇動、暴力、強制などが厳存すること。多数者の民主主義をめぐるイデオロギーを合理的再組織化の便法として相対化する必要があること。

そして、疑念を抱くに至る。すなわち、米国の社会科学は、コミュニティと公衆の改造を主題化したが、合理的な制御・組織化によって大衆化は解決可能という判断は、根拠として「使用」された1つのパラダイムを、必要以

²⁷ とりわけ、労働組合運動論は、権力エリートとしての労働組合リーダーについて論じ、他方で、政治的公衆の存在について論じている貴重な著作である C. Wright Mills and Helen Schneider, *The New Men of Power: America's Labor Leaders*, Harcourt Brace, 1948, (長沼秀世・河村望訳『新しい権力者』青木書店、1975)。この点は、中村前掲 1999 が詳しい。伊奈・中村前掲 2007 でも論じている。

上に普遍化しようとしているのではないか。ミルズの、歴史的特殊性という問題提起は、そこに一石を投じるものだった。米国の公衆ならば誰でも、不穏な兆候を、実感しているのではないのか、と。

米国の社会科学——上に引用した4つのミルズ批判——は、それぞれのやり方で、権力、欲望、軍事の暴走を制御する根拠を示している。しかし、上でものべたようにこうした「よりどころ」を提示し、アンダー・コントロールを宣言することよりも、暴走のリスクとメカニズムを考察することが大事である。ミルズは、近代民主主義が切り捨ててきたもの、ふたをしてきたものを、注意深く見つめた。少数者の支配もその一つである。迷うことなくエリート概念が採用され、集中する権力の制御不能が描き出された。パワー・エリートは旧来の人格的な存在ではなく、それを呑み込むクールで放縦な巨大機構の機能的部分である。

ミルズが、エリートという用語を用いたのは、このような自らの研究成果を踏まえてのことであった。それとともに、つい使ってしまう日常語、世俗的な興味を引くことばである「エリート」をもちいることで、「少数者」の存在を否応なく際立たせ、実感させるねらいもあっただろう。

4.3. 米国におけるパレート継承の2方向——パーソンズとミルズ

支配や組織形成における少数者の問題を総括し、エリート概念により定式化したのは、パレートである。基本的な議論の枠組は、非合理的なものと合理的なものの媒介を理論化することである。そして支配を、便法としての合理化（パレートの用語では論理化）という観点から類型化した。類型を俯瞰し、秩序＝社会均衡の便法を案配する存在としてエリートが論定される。異質な社会の成立、支配の転換は、エリートの周流として把握される。パレートは、様々な領域における様々な立場のエリートを多元的に体系化する。非合理的な存在の合理的な意志を類型化する民主主義論は、民主主義の非論理

性、ファシズムの論理性などもシニカルに省察するものであった²⁸。

『社会学的想像力』でミルズが批判した T・パーソンズ (Talcott Parsons) は、ニューディール期の米国において市場と計画の問い直しが行われるなか、市場均衡と社会均衡を総合したパレートの議論を読みかえている²⁹。要となったのは、人間性=シンボルに着眼した権力論の転換である³⁰。M・ウェーバー的な権力=強制論に立つならば、合理的組織化における少数者の介入は不可避なものだと判断される。パーソンズは、自国の多元的民主主義に対する自負に基づき、権力=制御論に立つ³¹。合理的組織化の原基的ベースには、非合理的な情動や衝動ではなく、合理的なもの(意志や能力)が位置づけられる。パーソンズは、実在を合理的に再編成する分析的なリアリズムに基づき、システム均衡の制御を体系化した。これによりエリートという存在も、多元的なシステムに再編、解消される。

ミルズの『パワー・エリート』は、こうした米国における民主主義の分析的、概念的な組み替え、改造を批判した。多元的なシステム統合は合理化の便法、秩序の一類型にすぎないもので、エリート論の問題提起を一掃するものではない、と。他方で、ミルズは、マルクス主義の支配階級論も批判する。経済的な階級と政治的な支配を総合した理論化は、経済決定論として批判されている。エリート概念に照らせば、政治経済学的な変革図式も合理化の便法にすぎない。そもそも現代社会を制御下におく「支配者」は存在す

²⁸ Vilfredo Pareto, *Trattato di Scologia Generale*, G.Barbèra, 1916, (北川隆吉、廣田明、板倉達文訳、『社会学大綱』青木書店、1987)。この部分の説明は、居安正『エリート理論の形成と展開』世界思想社、2002。松嶋敦『経済から社会へ パレートの生涯と思想』みすず書房、1985、などを参考にしてまとめた。

²⁹ Talcott Parsons, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to A Group of Recent European Writers*, McGraw Hill, 1937, (稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造 1~5』木鐸社、1976-1989)。

³⁰ Parsons, *Politics and Social Structure*, Free Press, 1969, (新明正道監訳『政治と社会構造』誠信書房、1973-1974)。

³¹ Dario Melossi, *The State of Social Control*, Polity, 1990, (竹谷俊一訳『社会的統制の国家』彩流社 1992)。

るのか、と³²。

体制変革にせよ多面的制御にせよ、多数者の民主主義の問題を一掃し、決着をつけるものではない。権力集中の問題から目をそらさず、秩序形成の論理を類型的に見据え、民主主義の可能性と困難を複眼的に吟味する必要がある。こうした判断を可視化する理論としてエリート論が用いられている。

5. 社会学的想像力と政治的公衆——歴史的にスペシフィックなターミノロジー

5.1. スペシフィックな明視化

前節冒頭でも述べたように、『パワー・エリート』は、社会学的想像力の方法を駆使して書かれたものである。そして、リベラル、ラディカル、コンサバティブ、ハイブラウという4つのパワー・エリート批判は、米国思想史の潮流を整理したかたちになっている。このような整理は、大衆とエリートをめぐる社会科学の分水嶺を明らかにする。そして、「よりどころのない立場」、「マルクス主義への接近」、「史的唯物論の再構成」といった議論に解消できない、ミルズ社会学の実質を直視することが可能になる。

それは、「一般の米国人が実感していたこと」を手がかりに考えてゆくことである。特殊性という学問用語の概念的な系譜をたどり、分析するような議論だけでは、ミルズの歴史的特殊性論の意味、公共社会学の意味、そして社会学的想像力の意味はくみ尽くせない。

概念と実感との照合が、公共社会学の根拠であり、政治的公衆の根拠であり、社会学的想像力の根拠である。そのために、ダニエル・ベル (Daniel Bell) の『パワー・エリート』批判と対峙することが必要となった³³。ミルズは、「ハイブラウでないもの」を織り交ぜ、リベラル、ラディカル、コンサバティブな社会科学を批判した。その焦点となるのが、社会学的想像力であ

³² この部分、詳しくは前掲伊奈 2020 を参照。

³³ ミルズとベルの論争については、伊奈前掲書 2013 (とくに第七章) を参照。

り、歴史的特殊性である。これを考察することで、ミルズの公共社会学=政治的公衆論の実質も明らかにすることができる。

知識人ミルズは、つねに“Big shot”を狙っていたという³⁴。そこには、ミルズの論壇的な野心や、たぐいまれな商才や交渉力が見え隠れすることは否定できないが、「一般の米国人なら誰でもうすうす感じていたこと」に訴えかける意味もあったと考えられる。

『パワー・エリート』では、ポストや利害の配分、人脈や談合など、下世話とも言えるような話題を交えて、ひとびとにあまり知られていなかったパワー・エリートの世界が描かれている。冒頭で、——自身の生活圏(milieu)の履歴でもある——ローカルな社会と大都市上流社会を考察している。調査や史料、そして理論を重ねあわせて、社会構造の内情が描かれている。自由と平等、ゆたかさや安心への疑問を明視化するような、得体の知れない巨大機構のイメージが、米国人の生活実感にストンと落ちるよう、計算された記述がなされている³⁵。

人々の生活圏と社会構造、個人史と歴史を照らし合わせるのは、社会学的想像力の基本である。ではなぜ、「歴史的特殊性」なのか。これを次に考える。米国人の実感をスペシフィックに言語化し、明視化することが、ミルズの「方法の問題」だったのではないか。これが仮説である。

5.2. “specific milieu”

“specific”は、『社会学的想像力』に、75回(“specificity”などを含む)出てくる。文庫版翻訳では、文脈に応じて、「特定」、「具体的」などと訳し分

³⁴ Stanley Aronowitz, *Taking It Big: C. Wright Mills and the Making of Political Intellectuals*, Columbia University Press 2014. Geary, op.cit. 2009.

³⁵ また、ガスから学んだ知識、『性格と社会構造』の枠組みが駆使されていることもわかる。ガスが来日した際のホスト役の一人である古賀英三郎氏から、1985年にうかがった話によると、ガスは、『パワー・エリート』は自分の考え方に基づいて書かれた著作であると主張していたという。こうしたガスの言い分は、Oakes & Vidich op.cit. 1999 にも書かれている。

けられている。“historical specificity”のみ、「歴史的特殊性」と訳されている。まず、『社会学的想像力』の次の部分に注目したい。

「忘れてはいけないのは、特定の生活圏 (specific milieu) においては、人がしばしば自分の行為を制御しているということである。こうした制御がどこまで可能かということは、私たちの研究目的の一つである。仮構の世界だけでなく、現実世界にも司令官がいて、さらに企業や国家のトップなどもあることを忘れてはならない。しばしば注意されてきたことであるが、人は何かに黙って従うような存在ではない。この事実が意味するのは、自分の活動についての予測を意識しており、自分自身の方向づけを修正することができ、しばしば修正を行っているということである。しかも、予測どおり動く場合もそうでない場合もある。どちらになるかは今のところはうまく予測できない。人は一定の自由をもっているわけだから、何をするかはやすやすとは予測できないのである。」³⁶

“specific milieu”は、この引用部分も含めて、『社会学的想像力』で6回用いられている³⁷。

問題を定式化し、予測と制御を行っていく根拠となる“specific milieu”は、個々人に固有のものである。しかし、ヴィヴィッドな生活実感は、他方で、限定的なものであり、固定化されてしまうと、紋切り型のものになってしまう。そこで、歴史的社会構造を媒介する社会学的想像力が必要になる。

総合すると、“specific milieu”は、歴史的社会構造のなかに的確に位置づけられ、さまざまな事象を明視化し、問題化することが可能な状態にある生活圏、歴史的なコンテクストに開かれた生活圏という意味に解釈できる。スペシフィックなものとは、——少なくとも冷戦期においては、——歴史的社会

³⁶ Mills 1959 op.cit. p. 116.

³⁷ Ibid. p.10, p. 68, p. 116, p. 129, p. 135, p. 162.

会構造と生活圏を交差させ、問題化するもの、ということになるだろう。

5.3. スペシフィックな“trouble”と社会学的想像力の定義

ミルズは、生活圏における行為の予測と制御について述べている。そうした実感の根拠としての生活圏は、スペシフィックであるためには不可欠である。ミルズは、普通の米国人ならば、「なにかおかしい」と「感じている」ことを起点に『社会学的想像力』を論じ始めた。プライベートな“trouble”は、パブリックな“issue”とともに、社会学的想像力を働かせる重要な区分とされている。

日常的な生活圏では、こうしたことばの利用 (uses)、語用 (pragmatics) が、日々行われている。状況によって、ことばの使われる意味は、概ね決まっている。人々は、状況を理解して、ことばを当てはめ、意思疎通をする。こうした行為は、スペシフィックである³⁸。

「スペシフィックな“trouble”」は、公論の“issue”と関連付けられたものであり、米国のコミュニティ、タウンシップにおいて、公衆の要件と見なされる。これが、歴史的な大変動のなかで、再検討される必要が生じた。その対処を目指したのが、哲学の改造、知の改造といった 20 世紀のプロジェクトである。予測と制御とは、『社会学的想像力』でミルズが批判した社会科学の核となる着想である。

分析的な抽象を行うことで明視化されるものがある。しかし、それは現実

³⁸ スペシフィックな“trouble”の意味を理解しようとするとき、大きな手がかりとなったのが、最所フミによる“trouble”の説明（『日英語表現辞典（ちくま学芸文庫）』筑摩書房、2004）である。「この言葉には、colloquial ないい方があって、馴れない人には的確に意味を掴むのが難しい。「悩ます」とか、あるいは何となく「厄介なこと」という意味に受け取って、たいていは曖昧に解釈してしまう。He got her into trouble. と言えば、その意味するところは一つしかない。「面倒なことにした」などという vague なことではなく、「男が結婚もしないで女を pregnant にした」という意味である。妊娠させることは面倒なことには違いないが、ただの「面倒なこと」とか、「厄介なこと」というのでは、その意味を的確に掴んだとは言えないのである。」この引用に続いて、意味が決まっている例がいろいろ書かれている。

ではない。現実と抽象を混同せず、そこから翻って現実を説明する。そこでミルズが重視したのは、分析も、抽象などどんな明視化も、ひとつの (specific) ものであり、普遍的に妥当するものではない。そして、冷戦期の米国で、社会問題をスペシフィックに考えるためには、いったん立ち止まり、歴史的な社会構造と生活圏とを「利用」できなければならない。そうミルズは考えたのではないか。こうした省察は、社会学的想像力の定義と関わっている。歴史的特殊性、歴史的にスペシフィックであるということは、古典的な社会科学の知見と生活圏の実感を媒介するものではないか。社会学的想像力を定義する区別——“trouble”と“issue”、“milieux”と“social structure”、“biography”と“history”など——が³⁹、“specific”ということばで媒介されている。

5.4. “specificity”と動機の語彙論——なぜ“milieux”か

4.1の冒頭でも述べたように、ミルズは、学術用語や論壇用語——“social structure”や“issue”——を用いつつ、他方で生活圏のことば——“trouble”——を交差させ、社会学的想像力を定義している。それでは、なぜ、“milieux” (生活圏) ということばが選択されたのか。

ここで、1990年代頃から社会運動論で、ミリュー (milieux>milieu 「あいだ」) 概念が注目されてきたことに言及しておきたい。この概念は、生活圏と公共圏の連結を論じる際にしばしば用いられる。社会運動論のミリュー論では、特にミルズへの言及はないものが多い³⁹。

政治学者の高橋肇は、ミルズの『社会学的想像力』との関わりで、ミリュー概念を論じている。高橋は、『社会学的想像力』のもととなった論文

³⁹ 社会運動論としては、松谷満他「東京の社会的ミリューと政治」『徳島大学社会科学研究』20 徳島大学、2007。文化社会学、ドイツ社会学研究としては、田中紀行「現代ドイツにおける〈文化と社会構造〉研究——ライフスタイル研究を中心に」『社会学雑誌』15、1998。ドイツ史研究としては、高橋秀寿『再帰化する近代——ドイツ現代史試論市民社会・家族・階級・ネイション』国際書院、1997。同「ドイツ「国民」の歴史の変遷と現在——ミリューと「想像の共同体」——」『立命館言語文化研究』6巻5・6号併合 1995。地理学、地学の観点からは、西川治「人間と環境——人間環境学への序章——」『地学雑誌』100(6)、1991。

が「大衆社会とリベラル・エデュケーション」(1954)であり、そこで“milieux”は、12回登場すること、起源はイポリット・テーヌ(Hippolyte Adolphe Taine)から、オーギュスト・コント(Auguste Comte)やアレクシ・ド・トクヴィル(Alexis de Tocqueville)にまで遡ることを指摘している。ミルズの議論のポイントは、政治的公衆の条件として、リベラル・エデュケーション、リベラルアーツの改造があげられ。その要として、社会学的想像力が位置づけられていることである。

そして、これは、動機の語彙(vocabulary of motive)論、ことばを「利用」する“pragmatics”——ミルズの初期の用語で言えば記号学を社会学化した“sociotics”——と関連付けて理解することができる⁴⁰。動機の語彙は、問題の適切な言語化に用いられる⁴¹。動機の語彙とは、あてはめることで、瞬時にスペシフィックな理解と解決を可能にすることば(速記用語 short hand terms)である。『社会学的想像力』において、動機の語彙と“milieux”は同じ場所で論じられている。

「人々が知りたいのは社会的・歴史的な現実である。…(中略)…人々は事実を切望している。人々はその意味を探している。そして、自分自身を理解する手がかりとなるような信頼できる「大きな図絵」を欲している。人々はまた、指針となる価値、感情表出の方法やスタイル、動機の語彙(vocab-

⁴⁰ ミルズは、若い頃に、プラグマティズム、とりわけチャールズ・W・モリス(Charles W. Morris)の記号論に傾倒し、語用論(pragmatics)の社会学化する“sociotics”を提唱した。『社会学的想像力』の批判でも、この着想を用いている。すなわち、システム論を分析的な用語の統語論(syntax)にこだわるもの、計量調査を計測変数の意味論(semantics)にこだわるものとして批判している。統語論と意味論の媒介は、社会学的想像力の定義と関わる。そして、動機の語彙論と社会学的想像力の関係もここに示されていると思う。

⁴¹ 動機の語彙はもう1カ所本書で用いられている。「人間の動機づけは、ある社会で安定した納得を与えている動機の語彙によって、そしてそうした語彙の社会的な変化やゆらぎによって、理解されなくてはならない。いや動機の典型的な自覚のされ方は人によって様々であるということすら、そのように理解されなくてはならない」(Mills 1959, op.cit. p. 162)。

ulary of motive [状況を理解し、納得させる理由を付与する言葉]) を求めている。これらを今日の文学に求めても、簡単には見つからない。文学に見出されるべきこれらの精神があるかどうかの問題なのではない。多くの場合見つけれないことが問題なのである。」⁴²

ミルズが、トクヴィルやテーヌを評価するのは、生活圏と公共圏を媒介するスペシフィックな「図絵」を描出しようとしたからである。そして、彼らが用いた“milieux”とは、状況を適切に (specific) 判断して問題化する場として考えることができるだろう。ミルズは、次のように、文芸や芸術においても、“milieux”の「図絵」の提供、適切な——歴史的にスペシフィックな——言語化ができないことに触れている。リベラルアーツと古典的社会科学を交差させる場、そして政治的公衆のポテンシャルを際立たせるために、“milieux”という媒介する語彙が選ばれたのではないだろうか。ミルズが、——抽象的な統語体系や変数体系のみならず、——法則探求の固定化も批判していることにも注意したい。

「テーヌは、「社会学者」にはならず、「文学者」にとどまった。そのことは、おそらく一九世紀の社会科学の大半が、自然科学者において確立されたのと同じような、「法則」を熱心に探求していたことの証明である。適切な社会科学を欠いていたことから、批評家、小説家、戯曲家、詩人などが、身のまわりの問題、さらには公的問題を定式化する主たる、しばしば唯一の担い手となった。芸術は、劇的な切れ味を可能なかぎり発揮して、問題としたものを表現し、しばしば注意を喚起する。」⁴³

⁴² Mills 1959, op.cit. p. 17. () 補充部分は同訳、p. 40.

⁴³ Mills 1959, op.cit p. 18-19.

6. おわりに

以上、歴史的特殊性の原理、歴史的にスペシフィックであることを核に、ミルズの主要テキストを検討してきた。すなわち、最初期の記号論の用語を用いた知識社会学 (sociotics)、ことばのあてはめに着目した動機の語彙論、生活圏と公共圏、個人史と歴史の媒介を論じた社会心理学、1954年のリベラル・エデュケーション論、『社会学的想像力』、『パワー・エリート』、『マルクス主義者たち』など。そして、歴史的特殊性と社会学的想像力の観点から、問題を解決する政治的公衆の可能性を再構成した。

ミルズは、米国社会学の方法を全否定していたわけでない。むしろ、知の改造への取り組みを評価していたとすら言える。しかし、米国の自負に基づく決着の絶対化は辛辣に批判した。決定版の解決策を相対化するため、ミルズは権力一元論を持ち出し、独特の言葉づかいを工夫し、権力論争の「図絵」を示した。あらためてガースの貢献は再評価されるべきである。ただし、生活圏の語彙と古典的社会科学のターミノロジーの“syntax”、“semantics”、“pragmatics”を点検し、社会学的想像力を提示した点は、学生時代より培ったミルズの独創である。

ミルズは、——ファシズムから冷戦に至る状況にその妥当性を限定し、——歴史性にも歴史的特殊性の原理が再帰的に適用されるべきだと言っていた。非歴史的な考察がスペシフィックな場合もあることにも言及があった。法則的認識の一元化には疑義を示していたが、それがスペシフィックな場合もあることを論じていた。すなわち、歴史的にスペシフィック、分析的にスペシフィック、計量的にスペシフィック、弁証法的にスペシフィック、法則的にスペシフィック、文芸的にスペシフィック等などを、比較する根拠とターミノロジー、つまりはスペシフィックなもの類型学を探求することがミルズの方法であり、政治的公衆の条件だったのではないか。

パーソンズは、素朴なタクソミーを記述的と批判し、分析的、操作的な社会学の体系化をめざしていた。このような立場からは、ミルズの類型論は厳しく批判されるだろう。実際、パーソンズはミルズを批判している。パー

ソングは、心ない批判を受けても、その意味を考えぬいたという逸話もある人である。ミルズを批判したのは、それなりの理由があったのだろう。パーソンズの歩みを注意深くながめると、ミルズの批判を真摯に受け止めた結果であるようにも見えてくる。パーソンズは、ミルズの死後、権力論争を振り返りつつ、自己目的化するものの制御——「政治と社会構造」をめぐるシンボリックメディア論——を論じている。さらに、歴史を論じ、知識社会学について論じ、さらに人間の条件を問うパラダイムを提起するに至っている。

ミルズとパーソンズの対立は、公衆と大衆、権力の集中と多元化、強制論と制御論から、公衆の改造、知の改造、ヴェーバー理解やヴェブレン理解にまで至る⁴⁴。対立の構図は、権力論争の構図に縮約される。重要な論点は多々あるが、特定の思想に帰依しないミルズをペシズムと断じたことなど、冷戦期のイデオロギー対立に解消されてしまったことは少なくない。権力論争の「図絵」は、学史的に再検討される必要があるのではないか。その際、ピボットとなるのは、——「使えるミルズ」の実質を探求する「ミルズ・スタディーズ」提唱者のひとりであるブルーワーが着目した、——歴史的特殊性の視点ではないか。

スペシフィックなもの類型論は、こんにち的には凡庸なのかもしれない。しかし、諸類型の使用⁴⁵を、社会学的想像力の契機、政治的公衆の条件、歴史的特殊性の意味——そしてあえて付言すれば、リベラルアーツの探究——と関連付けることは、社会科学史の課題として一定の意味があると思われる⁴⁶。

⁴⁴ パーソンズはアーマスト・カレッジでエアーズに学んだ。パーソンズが操作論の立場から、ヴェブレンの本能論を決定論と批判したことについては次の論文を参照。Talcott Parsons, "Sociological Elements in Economic Thought", *Quarterly Journal of Economics*, 49, 1934.

⁴⁵ こうした往還を、筆者は"substantive"ということばと関連付けた。伊奈前掲 2013, p.p. 34–36.

⁴⁶ 他所でも引いた鶴見俊輔の文章を引用しておく。「『資本論』第一分冊に：筆者補充）注釈があって、「価値」というとき、「自分はこの価値を交換価値に限定する」と。そこが面白いんだ。使用価値は重大であることは認める、しかしあえて捨てると言っている。ここは哲学者としてのマルクスの偉大さだね。別の考

キーワード

社会学的想像力、公共社会学、政治的公衆、C. ライト・ミルズ、歴史的特殊性

key word

sociological imagination, public sociology, political public, C.Wright Mlls, historical specificity

え方があるって認めているんだ。抽象には、つねにその働きがある。…俗流のマルキシストは、抽象と現実を混同しちゃう。それはクワインが言う、「モノと言葉を混同している。そうでない人間は、今三人しかいない。タルスキとカルナップと自分だ」という、その洞察と非常に似ているね。」(『たまたま、この世界に生まれて——半世紀後の『アメリカ哲学』講義——』Group SURE, 2007, p.p. 208-209)。